

と

ある自治会が二度目の寄席に呼んでくれた。前回とても評判がよかった、と聞いていたので、会場に入って用意された座席を見たとき、そのあまりの少なさに意表を突かれる思いがした。初回ならともかく二回目のこれは激減が明らかで、前回言われるほど喜んでもらえてなかったのか、と残念に思った。思い当たる反省点もあったのか、しばらくそれを反芻した。

いろんな場を経験した方がいい。熱かったり温かかったりが常だと思わない方がいい。冷たかったり寂しかったりも感じながら続けていけたらいいと思う。だから、会場の広さの方がうんと目立つ今回の寄席だつて、子どもにもぼくにも大切な一回だ。

主催者が申し訳ないという表情で、「いやあ、今日はほかに大きな行事が二つ重なつてしましまして…」

と頭をかきながら言う。「いやいや、人数は関係ないですから」

と、ぼくは自身の信条に従つて答えるのだが、一方で一回一回に現状を超えるための何かを用意して高座に臨んでいる子どもたちがかわいそうにも思えてしまうのだった。

子どもたちはありがたいことに、ぼくの煩悶など

まったく関係なしにいつもどおり熱演した。休憩後はお客さんに席を移動してもらつてまばらを解消し、小さいながらも客席をぎゅつと詰めた。寄席の場合、その言葉通り、客が「寄せ」合っていることが演者にとつても客にとつても大切なのだ。隣の人が笑っているから自分も笑うわけ。

「寄せ」効果によつて子どもたちと観客との距離が物理的にも心理的にも縮まって、本当に人数は気にならなくなった。だから終わつて別れ際にもう一度人数を詫びられたときには、ぼくは今度はまったく正直に「人数は関係ないですから」と言った。

その晩、保護者から連絡が入った。寄席の後、出演者家族と一緒に会場近くの祭りに行つて茶席に入つたら、そこでお茶を点でていた女性が「あなたたち落語の子じゃない？」と声をかけてきた。一回目の寄席に行つたが二回目はこのイベントと重なつてしまつて行けなかつたのだと言う。再会を喜んだ女性は茶菓子をどつさりくれ、子どもたちはそのお札にと小咄をその場で披露し、茶席に居合わせたお客と十名ばかりでにわか寄席になつたのだそうだ。

この物語の序章としてあの小人数があつたのだと思つた。そして、お札に小咄を語つたという結末がぼくにじんわりとした余韻をもたらした。

老い老いに
木幡智恵美 9

二

年目に突入した夕焼け通信には次々と新たな書き手が現れ、内容も多彩になる。紀行文のほか、自然の様子や身の回りの出来事、その時々を思い綴つたエッセイが何人かから寄せられた。Mさんが寄せてくれたのは、亡き祖母が病床で書き残した手記。今読むと三年前に亡くなった義母を思い出したり、自分の行く末を想像したり…。Aさんは、それまで父のする昔語りを耳を貸さなかったが、あることがきっかけで老いた父の過去に向き合うことになる。次々と知らされる事実に思いを巡らし、次第に二人の距離が縮まっていく様を描いた「父の後ろ姿」はなかなかの圧巻で、まるで連続ドラマを見ているようだった。次の回を心待ちにして読んだものだ。編集長の転勤先で新たな書き手として加わつたRさんは、知的障がいを抱える成人の施設にお勤めの方で、内地留学をした際に私はそこを見学していた。障がいがある人が軽かろうが朝玄関から出て、それぞれに合った活動や労働をする暮らし、ここぞあるべき施設の姿だと思つたものだ。Rさんは施設の理念や現在の在り様をさらに詳しく書き、ワークショップの様子も書いて下さつた。障がい児教育に携わる者としては、いちいち頷けるものであつたし、勉強になった。編集長からは、「磯釣り師」と紹介されているRさん。施設についての連載の後には「隠岐島後釣り紀行」が始まる。

さて、私はどうと、何と大それたことに、「野の草木と万葉」と題して、万葉集の歌を取り上げ、一年間連載している。学生時代に研究室の旅行で奈良へ行つた際、今は亡き犬養孝先生が山辺の道や甘樫丘を巡りながら朗々と詠われた万葉集の歌がずっと心の底に残つていた。普段手にすることも読むこともないので、こうして書くとなると読めるのではないかと思つたのだ。しかし、当時の日記を読み返すと、仕事をしながら三人の子育て真つただ中で、欲求不満で替わり番に調子を崩す子どもたちに振り回され通しの日々。いつ本を読み、いつ原稿を書いていたのだろう。HさんやOさんから原稿を受け取り、ワードで打つてもいた。若かつたのだ、あの頃は。エネルギーに満ちていた。忙しいからこそ、少しでも時間を見つけて何かをやらうとする自分だった。

30代フリーター 裏金以外に争点が見えない衆院選だった。

年金生活者 与党第1党の自民と野党第1党の立憲との間に基本的な路線の違いはない。経済はどちらも「大きな政府」路線に傾き、外交・安保は日米同盟を基軸としている。

30代 自民党はいつも「大きな政府」路線とは限らない。小泉純一郎の政権は新自由主義だと言われた。

年金 たしかに小泉政権の郵政民営化や緊縮財政は「小さな政府」路線だった。これに対し、その約6年後に成立した第2次安倍政権は「大きな政府」路線だった。転換を決定づけたのはリーマンショックだった。この世界的な金融危機を引き起こしたのは「小さな政府」路線を世界規模に広げた新自由主義とされる。

「小さな政府」路線と「大きな政府」路線は景気変動にもなつて交互に入れ替わるという従来の認識を否定し、「小さな政府」こそ経済政策の最終の姿と考えるイデオロギーが新自由

主義だ。リーマンショックはそれを打ち砕いた。東西冷戦での東側の敗北が、「大きな政府」こそ唯一の正しい経済政策と考えるイデオロギーを打ち砕いたのに似ている。

現在の先進諸国で目につくのは、「大きな政府」路線に傾きながら、「小さな政府」路線も残しておくという傾向だ。アメリカの大統領選では、トランプが「大きな政府」路線を伝統とする民主党のハリスにくらべ、倍以上の財政赤字の増加をとまなう公約を掲げているという試算がある一方で、共和党の伝統の「小さな政府」を志向する公約も打ち出している。

日本では、石破茂がバラマキとの批判もある地方創生の交付金の倍増を表明する一方で、市場からはアベノミクスと対照的な緊縮財政派と警戒されている。こうした政府の大小をめぐる路線の混淆は、おそらく野党にも言え、衆院選での与野党の対立軸を不明瞭にする一因になった。

30代 今回の衆院選では、自民党は総

わる新たな理念を打ち出したことがあげられる。それを表しているのが選挙スローガンの「国民の生活が第一」だ。「第一」に考えられなければならないのは、霞が関の利害でも、永田町の利権でもなく、国民の生活だというメッセージであり、右か左かではなく、上(政官)か下(民)かを問うス

裁選で激突した親安倍と反安倍の対立を引きずり、野党はかつてないほどバラバラだった。

年金 自公対野党というこれまでの対立の枠組みに見切りをつけ、新たな枠組みを求める民意が広がり始めているのではないか。

自民の分裂と野党の分散を象徴する選挙区が、裏金事件の責任を問われ、自民党非公認で立候補した安倍派5人衆のひとり萩生田光一の東京24区だ。彼の非公認には懲罰的な意味があったにもかかわらず、総裁選で敗れた高市早苗は応援演説に駆けつけた。一方、野党は裏金の萩生田を倒すために一本化するどころか、立憲、維新、国民がそれぞれ候補者を立てた。

30代 常識的に考えれば、裏金で危機に陥った自民党は結束し、政権取りのチャンスを与えられた野党は手を組みそうなのに、逆向きになったのはなぜか。

年金 自公対野党の対立が対立でなくなりつつあることが背景にある。内政では両者とも「大きな政府」路線を基

ローガンとなっている。

これは民主党が従来の自民党を磨き直した第2の自民党だったことを物語っている。自民党は理念よりも利権で結びついた政党と言われ続けてきた。この「利権」は国民の生活を守る政策を通じて獲得したものだ。一例をあげるなら、かつて食糧管理法(食管法)のもとで、政府が農家からコメを高く買い入れ、消費者へ安く売り渡していた二重価格制は、農家の生活を守るとともに、その見返りとして自民党へ政治献金と選挙の票が入ってくる利権のシステムでもあった。

この生活密着型とも言える自民党の政治の流儀から「利権」の部分を除き、すべてを国民に還元しようというのが「国民の生活が第一」のスローガンと考えることができる。自民党内で利権をめぐる抗争に明け暮れた小沢一郎が、そこでの勝者になるだけでは満足できず、それを超える野望を抱いた結果がこのスローガンのもとでの政権交代だったということが出来る。

年金 その要因を考えると、ひとつは高度経済成長を経て国民が貧困から脱した結果、社会主義か資本主義か、左か右かといった理念的な要素が政治に占めるウェイトが低下したことがある。世界的には東西冷戦の終結が決定的だった。

もうひとつは、そうした変化にあわせて、当時の民主党が従来の理念に代

ニュース日記 943
中村 礼治

衆院選から見えてきたもの